

川原寺瓦窯産の瓦の再検討

―第 119-5 次

1 はじめに

川原寺瓦窯 SY595 は、2003 年に川原寺北辺部でおこなわれた飛鳥藤原第 119-5 次調査において検出された瓦窯である（図 67）。その遺構や遺物については、すでに報告書（以下『報告』と表記）が刊行され詳細があきらかとなっている¹⁾。『報告』においては、川原寺瓦窯で生産された瓦を比定した上で、川原寺創建期の瓦窯として知られていた五條市荒坂瓦窯、『弘福寺三綱牒』の記載などから大和国広瀬郡に存在したと想定される仮称、広瀬郡瓦窯を加えた 3 ヲ所を川原寺創建期の瓦窯とし、そのうち荒坂瓦窯がもっとも早く操業したことはあきらかであるが、残る二つの瓦窯の先後関係は不明とした。

筆者は近年、川原寺出土軒瓦の再整理と研究を継続的にこなっており、川原寺瓦窯についても遺構、遺物の再検討をおこなった。その成果の多くは『報告』の記載を追認するものであったが、いくつかの点を新たにあきらかにすることができた。以下、その概要を報告する。

2 川原寺瓦窯 SY595 と関連遺構の概要

発掘調査により川原寺創建期の整地層（下層）と奈良時代の整地層（上層）が確認され、それぞれにともなう遺構が検出された。このうち川原寺瓦窯 SY595 は川原寺創建期の遺構であるが、瓦窯の北東およそ 5.0 m の位置では、奈良時代の遺構として瓦溜 SX594、およびこれと同時に設けられた石組暗渠 SX593 が検出された（図 68）。以下、『報告』の記載にしたがい概要を確認する。

川原寺瓦窯 SY595 は、調査区中央部の西壁に瓦窯先端の焚口部がかかる形で検出された（PL.21-1）。窯体の大部分は調査区外の西側丘陵斜面に延びる。焚口は幅 1.2 m で約 10° の傾斜をもつ。前庭部には灰原が広がるが遺物を含まない。掘立柱建物群、創建期の炉群の炭層より下層に位置するため、操業時期は創建期にさかのぼる。瓦窯の上部は削平され窯壁が高さ約 20cm までしか残らない。瓦窯の埋没土には遺物を含まない。瓦窯埋没後の整地層からは、熔着した平瓦の塊（以下、熔着瓦と表記）2 点のほか、平城Ⅲ期の土器が出土した。

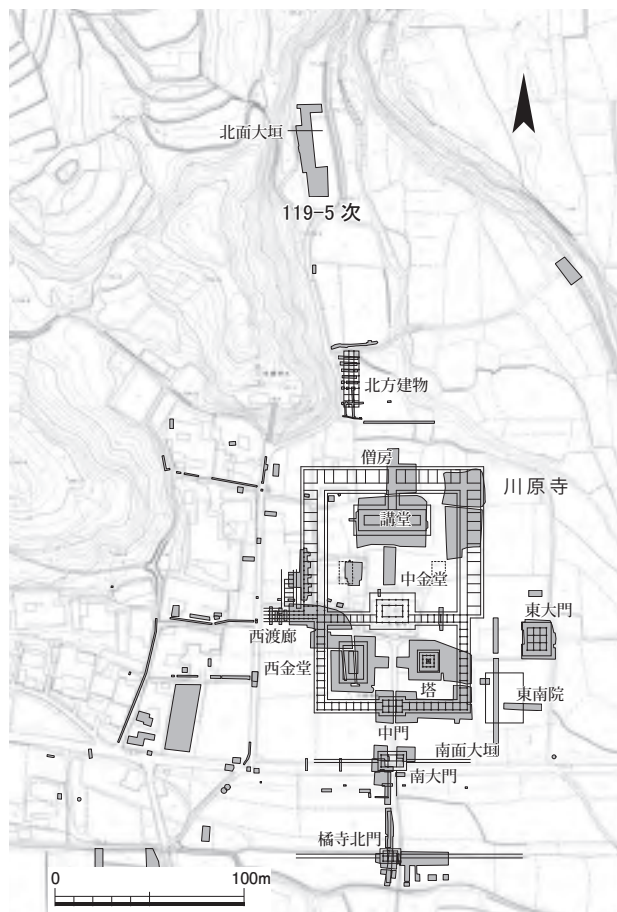


図 67 飛鳥藤原第 119-5 次調査区位置図 1 : 4000

瓦溜 SX594 は瓦窯 SY595 の北東およそ 5.0 m に位置し、約 3.0 m 四方の範囲から生焼けの瓦や焼き歪みのある瓦を含む瓦片が大量に出土した。これらは瓦窯 SY595 で焼損した瓦と考えられるものの、出土した土器は瓦窯埋没後の整地層と同時期のため、奈良時代中頃に周辺一帯を整地した際に、すでに天井部が崩落していた瓦窯 SY595 を削平し、瓦を再廃棄した遺構と推測された。創建期の炉群の上層に位置する。このほか、瓦溜 SX594 の中央に設けられた東西方向の石組暗渠 SX593 があり、SX594 と同時につくられた遺構と考えられている。

以上のように、川原寺瓦窯 SY595 の窯体内や灰原などからは遺物が出土せず、瓦窯に関連する瓦溜 SX594 やそれと同時に設けられたと考えられる暗渠 SX593 も含め、出土状況から瓦窯で生産されたことが確定できる瓦はない。このことはすでに『報告』でも指摘されている。『報告』において、川原寺瓦窯で生産されたものと推定されたのは、熔着瓦、焼き歪みのある瓦、生焼けの瓦などである²⁾。



図 68 飛鳥藤原第 119-5 次調査遺構図 1 : 250 (左 : 創建期、右 : 奈良時代)

3 川原寺瓦窯産の瓦

川原寺瓦窯産と推定された瓦の特徴は、すでに小谷徳彦氏があきらかにしている³⁾。今回、筆者も該当の資料を観察したが、小谷氏の観察結果と同様の見解に至った。以下、報告の記載および小谷分類にしたがい概要を説明する。なお、小谷分類は製作技法によるものであるため、これをまず説明したのち、胎土、焼成、色調の特徴を説明する。

(1) 丸・平瓦の特徴

熔着瓦には、平瓦が16枚熔着した塊と17枚熔着した塊があり、このほか瓦小片が熔着した平瓦も認められる(PL21-2)。いずれも凸面に密度13～15本/3cmほどの縄を使用したヨコ縄タタキを施す平瓦ⅢCであり、瓦窯SY595埋没後の整地層から出土した。焼き歪みのある瓦には、凸面にヨコ縄タタキないし叩き締め円弧を描く縄タタキを施した後、タタキ目を磨り消す平瓦ⅠD、凸面に密度9～11本/3cmの縄を使用したヨコ縄タタキを施す平瓦ⅢB、凸面に密度9本/3cmの縄を使用した叩き締め円弧を描く縄タタキを施す平瓦ⅣBがあり、これらは瓦窯SY595周辺から多く出土した。生焼けの瓦には、凸面にヨコ縄タタキを施したのち、ナデを施す丸瓦ⅠF、平瓦ⅣBがあり、これらは瓦溜SX594から集中して出土した(図69)。

ほとんどの平瓦には、凸面と側面の間、凹面と側面、両端面の間に面取りを施す。凹面は未調整で糸切り痕、布圧痕を明瞭に残すが、明確な模骨の杵板圧痕が認められない。色調は熔着瓦、焼き歪みのある瓦については暗青灰色から青灰色、生焼けの瓦は赤褐色から橙褐色を呈するものが多い。胎土はいずれも共通しており、粗い胎土で直径0.5cm以下の白色粒(長石)を非常に多く、直径1.0cm以下の白色粒(長石)をやや多く含む。

(2) 軒瓦、道具瓦の特徴

川原寺出土軒瓦の分類は、1960年刊行の報告書⁴⁾にしたがう。『報告』では、川原寺瓦窯産の軒瓦として、焼成不良の川原寺式軒丸瓦601型式C種(以下、川原寺601C

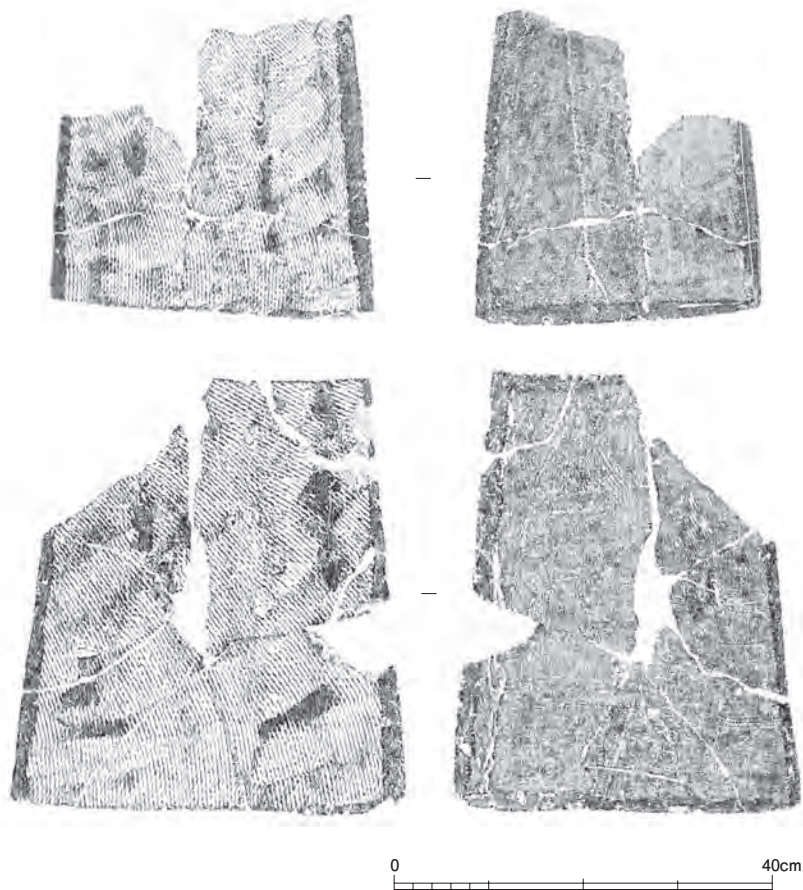


図69 瓦溜SX594出土平瓦ⅣB 1:8

と表記)、生焼けの川原寺式軒丸瓦608型式(以下、川原寺608と表記)のほか、これらと胎土の特徴が共通する川原寺式軒平瓦652型式(以下、川原寺652と表記)があげられている。このほか、今回の検討により、これらと胎土、焼成、色調が共通する焼成不良の鴟尾を抽出することができた。以下、それぞれの製作技法等の特徴を説明したのち、胎土、焼成、色調の特徴を説明する。

川原寺601C 川原寺601型式の製作技法の特徴は、金子裕之氏があきらかにしており、瓦当厚と瓦当裏面の形状によりⅠ型からⅢ型に分類している⁵⁾。本稿でもその分類を踏襲し、それぞれ金子Ⅰ型などと呼称する。本例は瓦当が薄く瓦当裏面が平坦な金子Ⅲ型である(図70-3、PL22-1・2)。瓦当裏面にタテないしナナメ方向のナデないしケズリを施し、接合部に周に沿うナデを施す。瓦当側面下半はヨコケズリを施し範端痕や枷型痕を残さないが、瓦当面から1.3cm程度まではこのヨコケズリが及んでおらず、軽いオサエ程度の調整に留まる。丸瓦部の厚さ

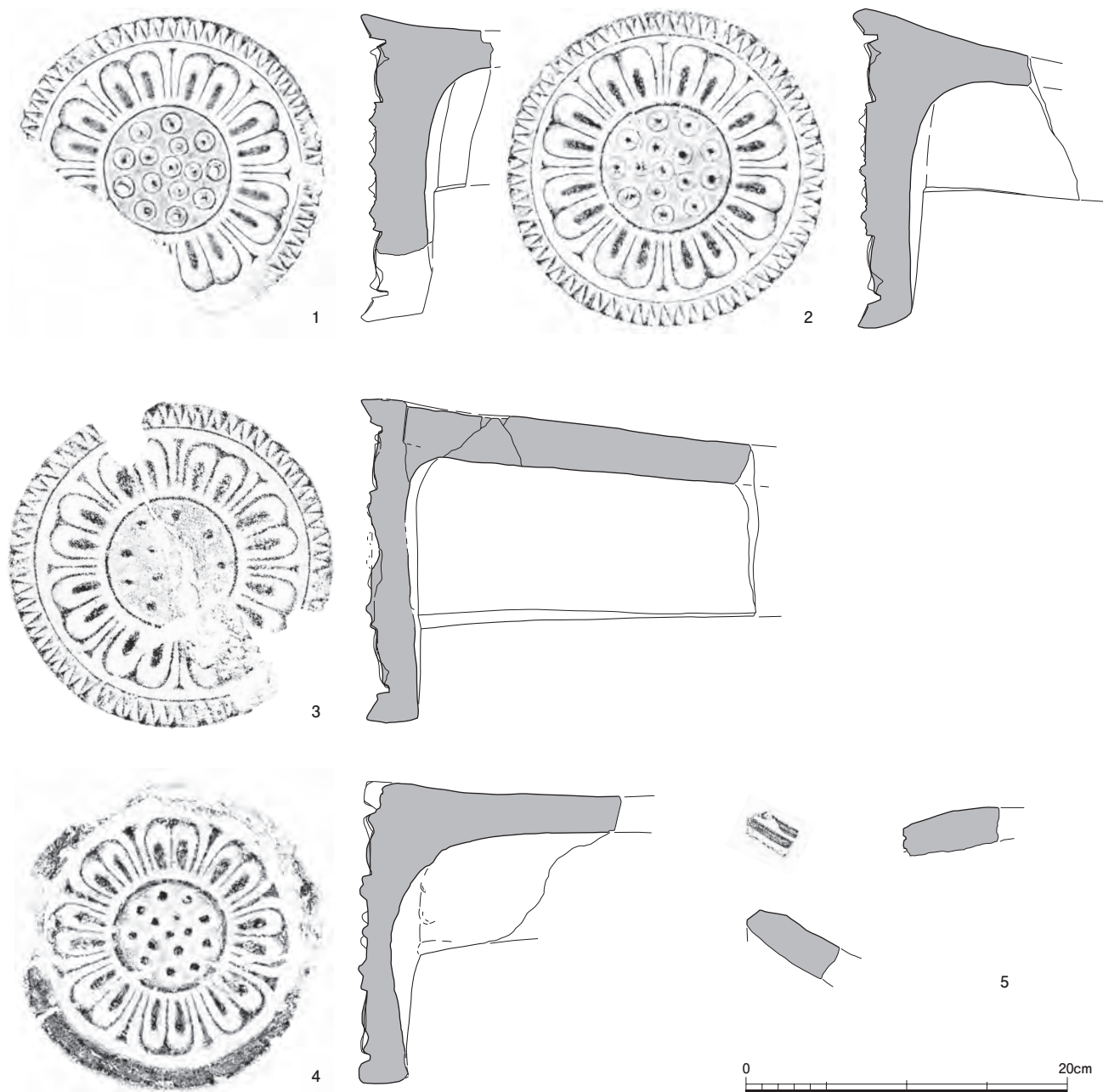


図70 飛鳥藤原第119-5次調査出土軒瓦 1:4

1～3: 川原寺601C (1: 範傷1段階、2: 範傷3段階、3: 範傷5段階)、4: 川原寺608、5: 川原寺652

が2.7cm程度と非常に厚い。丸瓦部先端の端面に円弧に沿う太い刻み目、凸面側に太いタテ刻み目を付ける。丸瓦部は瓦当裏面の高い位置に取り付けており、丸瓦部先端の差し込みはほぼない。接合部に少量の支持粘土を付加する。

川原寺601Cの範傷進行については、花谷浩氏、小谷氏があきらかにしており、1～5段階に分類可能である⁶⁾。本例は、そのうち範傷がもっとも進んだ5段階に該当する。

しかし、川原寺出土の他の5段階の製品では生じていない範傷も一部に認められることから、範傷5段階の中でも遅れて生産された可能性がある。この点については、川原寺だけでなく、和田廃寺など川原寺以外からの出土例を含めた範傷5段階の製品を、さらに詳細に検討する必要がある。

川原寺608 直立縁の外縁上面に鋸歯文を残すものと鋸歯文を削り取ったものがあるが、本例は鋸歯文を削り取

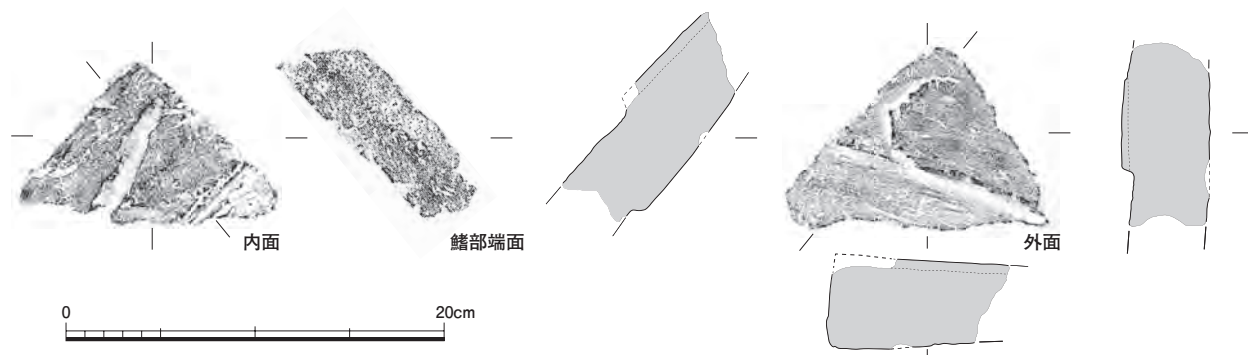


図 71 飛鳥藤原第 119-5 次調査出土鴟尾 1 : 4

ったものである（図 70-4、PL.22-3）。瓦当側面にはケズリないしナデを施し、範端痕や枷型痕などは認められない。瓦当裏面から丸瓦部凹面との接合部にかけて、ユビナデツケ、ユビオサエによる細かい凹凸や圧痕を多数残す。この調整により瓦当裏面は中凹みとなり、中央部付近の厚さは 1.5cm 程度と薄い。丸瓦部の取り付け位置は高く、接合部の支持粘土の量は多い。

川原寺 652 瓦当部左側面から 5.0cm 程度、瓦当面から 6.0cm 程度が残る小片（図 70-5、PL.22-4・5）。顎部が剥離するため残存する弧線は二重であるが、全体のバランスからみて、欠損する顎部にもう一重の弧線が巡る三重弧文とみられる。凹面は未調整で布圧痕、糸切痕を明瞭に残すが、瓦当面付近は、瓦当面から幅 3.0cm 程度の範囲にヨコヘラケズリを施し、さらにそのヨコヘラケズリによる面と瓦当面の間に幅 0.5cm 程度のヨコナデを施す。側面付近は、幅 1.0cm 程度の面取り風のケズリを施しており、川原寺出土の四重弧文軒平瓦 651 型式や平瓦の側面に多く認められる剣先状の加工をおこなっているものと考えられる。この面取り風のケズリと凹面の間に、さらに幅 2.0cm 弱のタテケズリを施す。顎部の剥離面には、ナデないしユビオサエによるとみられる細かい凹凸を残す。（清野孝之）

鴟尾 鰭部の破片であり、粘土紐の積み上げ単位で水平に剥離しており、頂部にいたる屈曲部付近の破片と考えられる（図 71、PL.22-6）。厚さ 4.5cm。内外両面に正段をもち、厚さ 0.4cm 程度の粘土を薄く貼り足した上で、段の削り出しをおこなう。段を削り出した後にナデ調整をおこなう面と、ナデ調整を省略して削り出しの痕跡を明瞭に残す面があり、前者が外面、後者が内面と考えられる。縦帯片や胴部片を欠いているため、全体の様相や時期を特定することは困難であるが、川原寺所蔵の創建

期のものとみられる初唐様式の鴟尾とは胎土・焼成が大きく異なり、ややにぶい赤褐色を呈する。（道上祥武）

胎土・焼成・色調の特徴 軒瓦、鴟尾の胎土、焼成、色調の特徴はほぼ一致しており注目される。まず胎土については粗く、直径 0.5cm 以下の白色粒（長石）を非常に多く含む。次に焼成・色調については、焼き歪みのある瓦、熔着瓦は暗青灰色ないし青灰色を、生焼け・焼成不良の瓦は赤褐色ないしややにぶい赤褐色、橙褐色、褐灰色を呈するものが多い。これらの胎土、焼成、色調の特徴は、川原寺瓦窯産と推定される丸・平瓦ともほぼ共通しており、川原寺瓦窯産の瓦の特徴と考えることができよう。

軒瓦・道具瓦の分布 川原寺瓦窯産と推定される軒瓦等のうち、川原寺瓦窯 SY595 周辺から出土したものは軒丸瓦の川原寺 601C、川原寺 608 各 1 点で、いずれも瓦窯埋没後の整地層からの出土である。瓦溜 SX594 周辺からは川原寺 608 が 5 点、そのやや北側からも 1 点出土している。川原寺 652 および鴟尾は、瓦窯 SY595 から南へ 15 m 以上離れた調査区南部からの出土である。瓦窯および瓦溜周辺から出土したものが大半を占めるが、やや離れた場所からも少量ながら出土していることから、瓦窯周辺を含む一帯の整地によって若干の瓦が移動したものと考えられる。

4 川原寺瓦窯産の川原寺 601C の様相

川原寺瓦窯の操業時期や仮称、広瀬郡瓦窯との先後関係を探るためには、範傷進行や技法の変化が明らかな川原寺 601 C が手がかりとなる。飛鳥藤原第 119-5 次調査出土の川原寺 601 C のうち、川原寺瓦窯産とされてきたのは前掲の焼成不良の 1 点のみであるが、これまで説明してきた川原寺瓦窯産の瓦の特徴もふまえ、本調査出土のその他の川原寺 601 C についても再度、検討する。

川原寺 601C は調査区全体で 16 点出土し、うち範傷段 1 段階が 1 点、1～2 段階が 3 点、3 段階が 5 点、3～5 段階が 1 点、5 段階が焼成不良の 1 点。範傷 1 段階と 1～2 段階、3 段階と 3～5 段階はそれぞれ製作技法や胎土・焼成・色調の特徴がほぼ共通する。このほか、範傷段階不明で胎土・焼成・色調の特徴が前者と共通する小片が 3 点、後者と共通するものが 2 点ある。

範傷 1 段階の製品は金子Ⅰ型（図 70-1）。瓦当裏面に丁寧なタテないしナナメズリを施す。瓦当側面下半は極めて丁寧なミガキに近いナデないしケズリを施し範端痕や枷型痕を残さないが、瓦当面から 0.5cm 程度の範囲に、このナデないしケズリが及ばない部分がある。丸瓦部の取り付け位置は高い。丸瓦部先端を観察できるものがなく、先端の刻み目や差し込みの深さは不明である。胎土は精良で直径 3mm 以下の黒色・白色粒を少量含む。焼成は良好、硬質で灰白色から青灰色を呈するが、範傷 1～2 段階のものには、やや焼成が甘く軟質で、灰白色を呈するものがある。

範傷 3 段階の製品は、いずれも金子Ⅲ型（図 70-2、PL22-7）。瓦当裏面にナナメズリないしナデを施す。瓦当側面下半はヨコナデないしケズリを施し、範端痕や枷型痕を残さないが、瓦当面から 1.3cm 程度の範囲にこのナデないしケズリが及ばないものがある。丸瓦部は厚さ 1.5cm 程度と薄く、取り付け位置は高いものとやや高いものがある。丸瓦部先端が観察できるものは、凹凸面にタテ刻み目、先端に円弧に沿う刻み目を付ける。丸瓦部先端の差し込みは深い。胎土は密ないしやや密で直径 2mm 以下の砂粒をやや多く含む。焼成が良好で灰色を呈するものと、やや良好で暗灰色ないし青灰色を呈するものが多いが、焼成がやや甘く軟質で、灰色を呈するものが混じる。

これらはいずれも、川原寺で出土する同段階の製品と共通した特徴をもち、うち範傷 1 段階および 1～2 段階の製品は荒坂瓦窯産と推定される。一方で、川原寺瓦窯産と推定される焼成不良の川原寺 601C とそれ以外を比べると、製作技法の特徴があきらかに異なり、胎土も川原寺瓦窯産の特徴とは異なる⁷⁾。

したがって、今回検討した 16 点の川原寺 601C のうち、川原寺瓦窯産と推定されるのは焼成不良の 1 点に限定される。わずか 1 点であるため現時点では明確にしがたいものの、この製品が範傷 5 段階であり、そのなかでも遅れて生産された可能性があること、加えて他の川原寺

601C とは明確に区別できる特徴をもつことは注目しておきたい。今後、この焼成不良の 1 点と共通する特徴をもつ資料を抽出していくことにより、川原寺瓦窯とそのほかの瓦窯との関係、操業の先後関係を明確にすることができるものと期待される。

5 まとめ

今回の検討により、川原寺瓦窯産と推定される瓦の特徴をより一層明確にすることができた。そのうち、特に研究が進んでいる川原寺 601C の特徴をあきらかにできたことは大きな成果である。今後、川原寺出土の膨大な資料のなかから川原寺瓦窯産の瓦を見分ける作業が必要である。その作業により、川原寺瓦窯における瓦の生産と供給の実態を把握するとともに、川原寺造営の一端に迫ることが可能になるものと期待する。

本研究は JSPS 科研費 JP20H01362 による成果の一部を含む。
(清野)

註

- 1) 『川原寺寺域北限の調査－飛鳥藤原第 119-5 次発掘調査報告－』奈文研、2004
- 2) 瓦窯 SY595 は調査区にごく一部がかかるのみであるため、隣接する未調査地にこれ以外の窯が存在した可能性は残る。本稿では、飛鳥藤原第 119-5 次調査出土瓦を分析対象とし、瓦の特徴から、出土地の直近に所在する瓦窯で生産されたと推定できる瓦を抽出するという手法をとるが、これらが厳密に瓦窯 SY595 のみに由来するものかどうか、出土状況から特定できない以上、確定することは不可能である。本報告においては、「川原寺瓦窯産（の瓦）」と表現するが、瓦窯 SY595 だけでなく、それに隣接して存在した可能性のある瓦窯の製品も含むことになる。
- 3) 前掲註 1 文献、および小谷徳彦「川原寺の丸・平瓦」『古代瓦研究Ⅲ』奈文研、2009。
- 4) 『川原寺発掘調査報告』奈文研、1960。
- 5) 金子裕之「軒瓦製作技法に関する二、三の問題－川原寺の軒丸瓦を中心として－」『文化財論叢』奈文研、1983。
- 6) 花谷浩「飛鳥の川原寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅲ』奈文研、2009。小谷徳彦「川原寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅲ』奈文研、2009。
- 7) 範傷進行と分布の関係については、瓦窯 SY595 周辺の瓦窯埋没後の整地層から焼成不良の川原寺 601C 1 点のほか、範傷 3 段階の 1 点も出土している。これを含む範傷 3～5 段階の製品、および製作技法、胎土、焼成、色調等の特徴が範傷 3～5 段階の製品と共通する 9 点は、調査区全体から偏りなく出土している。これに対し、範傷 1～2 段階、および製作技法、胎土、焼成、色調等の特徴が範傷 1～2 段階の製品と共通する 7 点は、いずれも瓦窯から離れた調査区南部から出土している。限られた情報ではあるが、川原寺 601C の古い段階の製品が供給された施設は、寺域北辺部付近よりやや南へ離れた位置に存在した可能性が考えられる。